

## 上侍塚古墳

おおたわら ゆづかみ  
栃木県大田原市湯津上地内

現地説明会資料 令和3年12月11日(土)

栃木県教育委員会事務局 文化財課  
宇都宮市埴田1-1-20 TEL 028-623-3425公益財団法人とちぎ未来づくり財団  
埋蔵文化財センター下野市業 474 TEL 0285-44-8441  
<http://www.maibun.or.jp>

公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターでは、県内にある重要な遺跡の調査研究とその活用を目指した「いにしへのとちぎ発見どき土器わく湧くプロジェクト」事業として、栃木県の委託を受けて、侍塚古墳（上侍塚古墳・下侍塚古墳）の発掘調査を行っています。初年度となる令和3年度は、侍塚古墳と周辺の航空レーザ測量を実施したほか、上侍塚古墳の墳丘の周囲にトレンチ（試掘坑）を設定して調査を進めています。調査はまだ始まったばかりですが、これまでに得られた成果をご紹介します。

## 1 侍塚古墳（上侍塚古墳・下侍塚古墳）

侍塚古墳は、上侍塚古墳と下侍塚古墳という2基の古墳の総称です。那珂川の西側段丘上に南北に約800mの距離を置いて並んでいて、南が上侍塚古墳、北が下侍塚古墳です。ともに古墳時代前期の前方後方墳で、規模は上侍塚古墳が那須地域最大、下侍塚古墳は2番目の大きさです。江戸時代の元禄5（1692）年に徳川光圀が発掘をした古墳としても知られていて、両古墳は昭和26（1951）年に国史跡に指定されています。

下侍塚古墳は昭和50（1975）年に周辺の圃場整備に伴って周溝部分が調査され、築造当時の土器が出土しました。一方、上侍塚古墳は光圀の発掘以来手つかずのままで、地域最大の古墳にもかかわらず、正確な築造時期や規模などはわかっていません。

## ・上侍塚古墳

総長	不明	墳長	114m
後方部幅	58m	後方部高さ	11.5m

## ・下侍塚古墳

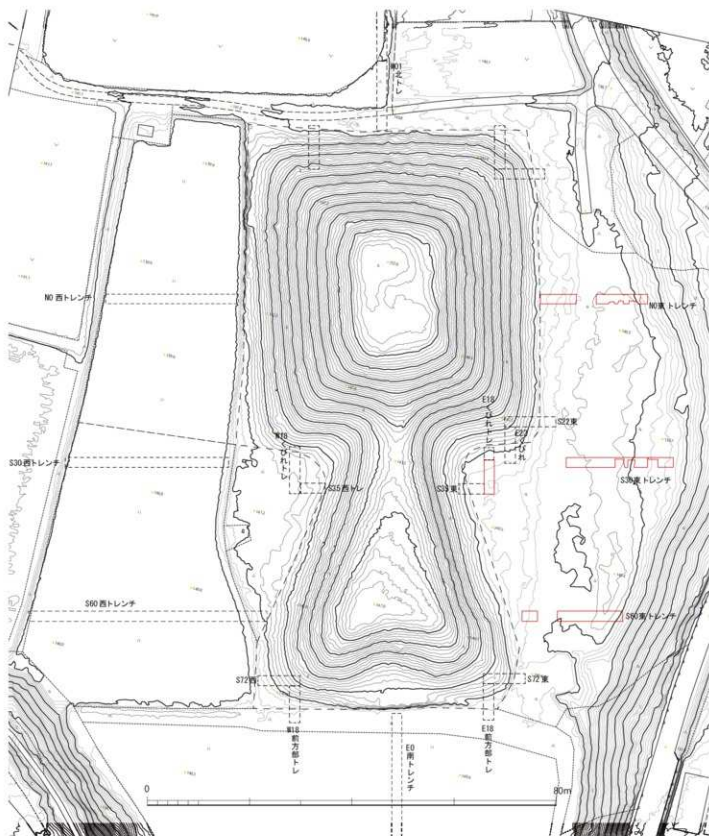
総長	108m	墳長	84m
後方部幅	47m	後方部高さ	9.3m
前方部幅	34m	前方部高さ	5.6m

上侍塚の北には、上侍塚・下侍塚より古い可能性が指摘される全長48.5mの前方後方墳、上侍塚北古墳があり、下侍塚の北には一辺17mの方墳とされる侍塚古墳群八号墳をはじめ8基の古墳からなる侍塚古墳群があります。



侍塚古墳周辺の航空レーザ測量図

## 2 上侍塚古墳 墳丘測量図およびトレンチ配置図



上侍塚古墳はとてもきれいに整った形をしています。ここでは、測量図から読み取れる4つのポイントとそこから考えられることを示します。

1. 墳丘のほとんどは一定の傾斜面 → 築造当時から段築はないのか
2. 後方部墳頂にくぼみがある → 江戸時代の発掘の痕跡か
3. 前方部前面がややくぼむ → 墳丘が崩れたのか
4. 古墳の東側に低いところがある → 周溝か

調査では、こうしたポイントも含めてこの古墳の本当の姿を明らかにしていきます。

### 3 トレンチ調査の状況

トレンチ調査は、古墳東側から行っています。調査によっていくつかの重要な点が明らかとなりました。

#### a 後方部東（N0東）トレンチ

墳丘の近くで径30～40cmの川原石が約200個出土しました。これらは墳丘表面の葺石が年月とともにはがれ落ちたものと思われます。トレンチ底面は墳丘側から東の崖面までほぼ平らで、周溝と呼べる部分はありません。地山のほとんどが石を多く含む砂礫層なので、古墳築造時にも掘り下げられなかったと考えられます。土器片がわずかに出土しています。



墳丘側のトレンチ



転落した葺石



崖面付近の砂礫層

#### b くびれ部東（E18、S30東）トレンチ

底面はほぼ平らで、墳丘裾から東に20mほどは東側よりもわずかに低くなっています。ただ周溝としては高低差が少なく、墳丘の周囲を整形したといった程度です。地山は砂礫層で、一部は土です。墳丘に近い部分で転落した葺石とわずかな土器片が出土します。



くびれ部墳丘側トレンチ(E18)



くびれ部崖面側トレンチ(S30東)崖面の砂礫層



#### c 前方部東トレンチ（S60東）

やはり周溝と呼べるような部分はなく、底面はほぼ平らな地山砂礫層です。墳丘に近い部分で転落した葺石が出土していますが、数はごくわずかです。



墳丘側のトレンチ



崖面側トレンチ

#### 4 徳川<sup>みつくに</sup>光圀の侍塚古墳発掘

侍塚古墳(上侍塚古墳・下侍塚古墳)は、今から約330年前、江戸時代の元禄5(1692)年に水戸黄門の名で知られる徳川光圀が発掘調査を行った古墳です。光圀は小口村(現那珂川町小口)の庄屋、大金重貞から献上された『那須記』に書かれた「那須国造碑」に注目し、碑に記された人物の氏名を明らかにするため碑周辺と侍塚古墳の発掘を行ったのです。

発掘にあたったのは光圀の命を受けた儒学者の佐々介三郎宗淳と大金重貞で、その時の状況は大金重貞が書いた『湯津神村車塚御修理』から知ることができます。

それによると、五尺(1.5m)ほど掘り下げると「へな土」があり、その付近から振文鏡1面、石釧1点、管玉2点、鉄鏃18点、鉄斧1点、甲冑片5点などが出土、これらの品々は絵師が図をとったあとで箱に納め、その箱を八尺(2.4m)下に埋めたとあります。出土品を入れた箱は松の板で作った長さ一尺(30cm)、幅七寸(21cm)、高さ七寸(21cm)のもので、釘でとめて松ヤニで目張りをし、蓋には光圀によって発掘の経緯を明らかにした書き付けがあったとされています。



『湯津神村車塚御修理』p17-p19 上侍塚古墳の出土品

これを実際の古墳に当てはめると、発掘地点は後方部の墳頂で、「へな土」が粘土だとすると埋葬施設は木棺を粘土で覆う粘土槨か、棺の下に粘土を敷く粘土床のような構造だったと思われます。後方部中央の地表面下1.5mの位置に古墳の被葬者が埋められていて、そこに副葬品としての鏡などがあったのでしょう。

発掘の後、墳丘には新たに土を盛り、松を植えて土が崩れないようにしました。古墳の中に埋めた箱の書き付けには「墓誌が見つかって被葬者の氏名がわかれば、記念碑を建てて後の世まで伝えようと思った」という意味の言葉があります。光圀は古墳の被葬者に対して敬意を払うとともに、この古墳が長く後世まであり続けられるようにと考えていたのでしょう。こうした考え方は、現代の文化財保護の思想と比較しても遜色ないものであり、「日本最初の発掘調査」、「日本考古学発祥の地」とされるゆえんでもあります。

今、侍塚古墳(上侍塚古墳・下侍塚古墳)は日本一美しい古墳と言われることがあります。古墳時代に築造された当時の姿もすばらしかったと思われますが、それに光圀が行った偉業が加わったからこそ現在の優美な姿になっているのです。